

# 未来への約束

敦賀市立東浦小学校

六年

田 田 田 田  
作 作 保 明  
聖 聖 明 日  
良 良 香 香



各務原市立川島小学校

五年

宮 武 濱 泉  
部 藤 口 田  
正 由 聖 梨  
大 衣 羅 乃  
華

「プハー。やっぱ暑く暑い日はジュースだよな」

と、浩輝が言った。すると、

「そうだよな。やはり真夏は冷たいサイダーに限ります」

と、七実。七月の真夏日。奈々原小学校からの帰り道。

「ああ、おいしかった」

雪乃は空き缶をゴミ箱に投げ捨てた。

「あれ、分別しなくていいんですか。それ燃やせるゴミですよ」

と、七実が聞くと、

「まあ、入れただけマシだよ」

晴来が答えた時、突然、後ろから聞き慣れない声でした。

「全然マシじゃないぞ。分別しなきゃダメだろ」

四人の前に現れたのは見たことのない二人の人物。

「て……ていうか、だれ？」

雪乃はおそるおそる聞いてみた。

「驚かしてすいません。申し遅れました。私たちは、未来からきたご存じエコロジーマンと4Rウーマン」

「ご存じと言われても……。知るわけないじゃん」と、雪乃。

「ご存じない？ それは残念無念。でももっと悲しいのは、人間のエゴのためにわたしたちのパワーが弱まっていることです。実は私たちは、人間のエコ運動が作り上げた結晶なんです。最近、みなさんがまたエコを忘れてしまっていて……」

4Rウーマンが悲しそうに話すと、エコロジーマンが、

「だから、みんなにエコや4Rを呼びかけようと、こうして旅をしているのです」

と力強く話した。

「4 R って何？」

浩輝が聞くと、

「4 Rとは、R e u s e (リユース)、R e d u c e (リデュース)、R e c y c l e (リサイクル)、R e f u s e (リフューズ) の略です」と、4 R ウーマンが得意気に答えた。

「リユースとはゴミの再利用。リデュースはゴミの減量。リサイクルは再生利用のこと。リフューズはゴミになりそうな物を断ること。例えばレジ袋をもらうことを断ること。そこで、みなさんにもエコや4 R を実せんしてほしいのです」

「実は、今地球が大変なことになっているんです……。みなさんは、地球温暖化を知っていますか。」

「えっ、ちきゅう死んだんか……?」

と、浩輝がつぶやくと、

「地球温暖化だよ！」

と七実が言った。

「そう、そのとおり。今地球では地球温暖化という環境はかいが進んでいるんです」

「ちきゅうはかい？　かんきょうおんだんか??」

晴来はますますチンプンカンプン。

「えっと、私達全然わからないので、くわしく教えていただけませんか」と、雪乃が言うと、エコロジーマンが説明を始めた。

「うむ。分かりやすく言うと、地球では人はものを動かすために石油や石炭を燃やして、CO<sub>2</sub>をたくさん出し過ぎているんだ。そのせいで自然界のバランスがくずれてきているんだ」

「しーおーつう？」

と、四人は声をそろえた。

「CO<sub>2</sub>というのは二酸化炭素のことだよ。そのせいで地球の温度が上がり過ぎてきているんだよ」

「それで、多くの動物が絶滅してしまっているの……」

「その通り。北極の氷もどんどん溶けて海面が上昇しているんだ」

「このCO<sub>2</sub>が私たちの最大の敵。CO<sub>2</sub>を倒すためにもこうして旅をしていくの」

「へええ、そうなんだ。二人は地球の救世主なんだ」

四人は感心して大ききうなずいた。

その時だ。突然強い風が吹き、不気味な笑い声が聞こえてきた。

「シッシッシ、貴様らがオレ達を倒すだと。笑わせるぜ」

「につひつひ」

「オーホッホ」

「シツシツシ!!」

風と共に現れたのはナゾの生物。

「あなたたちは……だれ？」

七実がたずねると

「オレ達はおまえ達の宿敵、CO<sub>2</sub>三兄弟だ」

「おまえたちがうわさのCO<sub>2</sub>三兄弟か。早く倒さないと地球が大変なことに！」

エコロジーマンが叫ぶと、

「オーホホ、もうおそいわ。君たちはオレらを怒らせてしまった」

「につひつひ、この世界をオレ達の仲間でもっといっぱいにしてくれるわ！」

「ちよつと待てよ！」

浩輝がさげんだが

「おまえらの都合なんぞ知るものか。いくぞ！」



『必殺マジカルCO2ビーム！』

「ギャー」

「うわー」

四人はいきなりの攻撃にびっくり。しかし、危機一ぱつ。エコロジーマンがたてになってくれた。おかげで四人は助かったが、CO2ビームがエコロジーマンの足に当たり、ばたりと倒れた。

「やったぜ。たいしたことないぜ、エコロジーマン」

「にっひっひ」

「オーホッホ」

「シッシッシ!!」

大きな笑い声を上げながらCO2三兄弟は消えていった。

「大丈夫？ エコロジーマン」

「エコロジーマンが死んじゃう……」

と雪乃が半泣きで言うと、

「エコロジーマンが助かる方法が一つだけあるわ」

と4Rウーマン。

「それは、みなさんがエコポイントを貯めること」

「エコポイント？」

「そう。みなさんがエコポイントを貯めればエコロジーマンのパワーが貯まって復活できるわ」

「エコポイントって、どれくらい貯めればいいの？」

と雪乃が聞くと、

「このけがはかなり重傷だわ。100ポイントは必要だわ……」

「それじゃあ、どんなことをすればいいんだ」

と浩輝が聞くと、4Rウーマンが一枚のメモを四人に渡してこう言った。

「それは、この紙に書かれています」

「らこあきり？ らやーし？ らじゃーし？ らひゃーじ？」  
雪乃はわけわかんないという顔で七実を見た。

★暗号キーワード：『一つ前の文字』

- ・ラコアキリ
- ・ラヤーシ
- ・ラヅヤーシ
- ・ラヒャージ

★ヒント

- ・ A      1 とげとげしている  
            2 松原海岸にある  
            3 葉が細い
- ・ B      1 塩からい  
            2 マリンブルー  
            3 季節によって日が当たる
- ・ C      1 冷たい山水  
            2 甘い  
            3 透き通っている

「これは私でもわかりません……何かの暗号のようですね」

「何だコレ」

浩輝はナゾのメモに文字を見つけた。

「『一つ前の文字』だって」

と雪乃。

「文字の前なんだから、五十音順の後の文字をつなげたら……」

「リサイクル。リユース……？」

と晴来がつぶやいた。

「それだ」

みんなは声をそろえて叫んだ。

「つまり、これはリサイクル、リユース、リデュース、リフューズ。だから4

Rのことではないかな」

「晴来、かしこい！」

みんなは暗号が解けて、がぜんやる気になった。

「4 Rには例えぼんなことがあるかな？」

と4 Rウーマンがみんなに聞くと、

「使い捨てのビニールのレジ袋を店の人に断ってエコバッグを使うなど、他にもたくさんあるよ」

「そうそう、ペットボトルのキャップを集めてリサイクルするとか、使った紙を古紙回収に出すとか……」

と七実が答えた。

「そうだね。君たちは小学生だから小さなことからやっていけると思うわ。みんなでがんばって」

4 Rウーマンが呼びかけると、

「よし」

と、四人は早速計画を立て始めた。★

はじめに七実が言った。

「四つあるから四人で分けようよ。じゃあ私はリデュースを担当するわ。リデュースは、ゴミの減量のことだよ。うちはレストランをやっているから、生ゴミがいっぱい出るの。それをたい肥にしたらどうかしら」  
すると雪乃が続けた。

「私はリユースにする。空きびんを集めるわ」

「じゃあ、僕はリサイクルということ。牛乳パックなら、工作に使おうと思つて何枚もとつてあるんだ」

晴来が力強く言った。最後に残った浩輝は、

「俺、リフューズつて何の事かわかんねえ」

となげやりな感じで言う。七実が厳しく諭す。

「リフューズとは、ゴミになりそうな物を断ることよ。あんたはスーパーに行つて、余分な包装を断ってもらうようになるべく多くのお客さんに呼びかけ

て！」

「じゃあ二時間後に奈々原小学校に集合だ」

晴来が言うと、みんなは力強くうなずいた。

「八十、八十五、九十、九十五……だめだあ。あと五ポイント足りない」

「どうしよう。早くしないと……」

するとエコロジーマンが、

「……メモにある物を……持ってきてほしい」

かなり苦しそうにそう言った。浩輝はメモを見ながら考えた。

「とげとげしていて、松原海岸にある、葉が細い物。松原海岸はこの近くにあるぞ。行ってみよう」

急いで松原海岸へ向かった。雪乃が、

「とげとげした細い物って、松の葉じゃないかしら。この辺りは『氣比けひの松原』  
と言われる全国でも有名な美しい松林だから」

と言って、松の枝を持ってきた。次に七実が、

「塩辛くて、マリンブルー。これは敦賀湾の海水のことじゃないかしら。敦賀  
湾は、水が透き通っていて、きれいな海として有名なんだ」

と言いながら、エコバッグで海水をくんだ。

「じゃあ、冷たくて、甘くて、透き通っている物って」

晴来が言うのと、浩輝が、

「これってゼリーの事じゃない。夏はやっぱり、ゼリーだよね」

「だから。『山水』って書いてあるじゃん」

とみんなは冷やかな視線を向けて言った。



相談した結果、しやう 笙の川の水をくむことにした。笙の川は、敦賀湾に流れ込む

清流として有名なのだ。さすが、物知り七実だ。

集めた物を持って小学校にもどり、エコロジーマンに渡すと、エコロジーマンはそれらを自分の命の箱へ入れた。みるみるうちに、エコロジーマンは、元気をとりもどした。

「エコロジーマン、よかったね」

全員で大喜びしていると、

「にっひっひ。オーホッホ。シツシツシ」

と、遠くからいやな声が聞こえてくる。

「エコロジーマンが元気になったからと言って、俺たちを倒せると思ったら大間違いだ。くらえ」

『超必殺マジカルスーパージョーCO2ビームデラックス！』

すると浩輝が、

「俺たちだって、負けちゃいないぜ」

四人は余っていた松の枝を手に取り、振り回し始めた。松の葉の先が武器になると思ったからだ。

「うわーっ。やめてくれー」

「近寄るな。……木の葉が……苦手なんだ……」

と言って三兄弟は苦しみはじめ、逃げまどう。

「そうか、わかったぞ！ 植物にはCO2を吸収する働きがあるからな！」

晴来が叫ぶと、雪乃がみんなに言った。

「周りの木の枝をできるだけ集めましょう」

CO2三兄弟の周りを木の枝で囲むと、みるみるうちに彼らは弱っていった。

「もう悪い事はしないので、助けて下さい」

と泣き始めた。みんなは枝を集める手を止めて、CO2三兄弟を見た。

「俺たちだって、好きで地球を乗っ取ろうとしているんじゃない。人間達が自分勝手に地球を汚すから、俺たちの心も悪に染まってしまったんだ。俺たちだって本当はこの地球で、みんなと仲よくしていきたいんだ」

CO2三兄弟の話聞いて、みんなはだまってしまった。

「何かいい方法はないのかなあ」

と晴来が言い、涙ぐんでいる雪乃を見た。すると、4Rウーマンが空から現れた。

「CO2三兄弟が安心して暮らせる星を見つけたわ。紹介するから、助けあげましょう。そのかわり、地球には二度と来ないという約束付きだけどね」

四人はとてもいい案だと、お互いの顔を見てうなずいた。

エコロジーマンのUFOに、三兄弟が乗った。四人を見て、小さく頭を下げている。四人が手をふると、三兄弟も笑顔で手をふった。

エコロジーマンがUFOに乗る時に、みんなに言った。

「君たちの大活躍のおかげで地球が助かった。ありがとう。九年後、君たちが二十歳になった時、またこの場所で会おう」

「それまでこの地球のこと、私たちにまかせて！」  
「僕たちが地球を、もっと美しい星にする！」

「ありがとう。君たち！」

六人はかたいあく手をした。晴来たちはUFOが見えなくなるまで空に向かって手をふり続けた。

「あくあ、行っちゃった」

「なんだか夢みたいだったね」

「戦って、疲れちゃったよ。アイスでも食べようか」

「分別は、わすれないようにね」

みんなで笑った。

空には、一番星が輝いていた。